

娯楽マンガ作品を教材に(4) はるき悦巳『日の出食堂の青春』

Using entertainment manga works as teaching materials: “Youth at Diner Sunrise
Hinode-Shokudo no Seishun” drawn by HARUKI Etsumi

茶谷 薫 CHATANI Kaoru

はじめに

筆者が以前から報告してきたように、「学習マンガ」と一般の「娯楽マンガ」には大きな違いがある。後者を学習に役立てられれば、大きな効果があるだろう<1,2,3>。学習内容を分かりやすく伝えることが目的の「学習マンガ」では、娯楽性は重視されない。対照的に、娯楽性が重要視される商業誌連載のマンガは、読者を惹きつける工夫が凝らされている。よって、娯楽マンガを教材化できれば、学生や生徒・児童のみならず、生涯学習の場で学ぶ社会人の学習効果も高いと期待できる。

そこで、筆者は娯楽マンガの具体的な教材化を目指し、授業でも例示などを通じて実践している。本稿では、はるき悦巳の『日の出食堂の青春』<4>から教材の例として使用可能な点を列挙する。

はるき悦巳と『日の出食堂の青春』

はるき悦巳と『日の出食堂の青春』の出版経緯

はるき悦巳は1947年、大阪市出身である。高校までは大阪在住で、大学進学に伴い東京に出た。1977年に平凡出版（現マガジンハウス、前は凡人社）の『平凡パンチ劇画賞』で佳作を受け、翌年の『平凡パンチOh!』に掲載された『政・トラぶっとな音頭』でマンガ家デビューした。朝日ソノラマの『マンガ少年』掲載の『伝説』、双葉社の『漫画アクション』に掲載された『ドンチャンえれじい』、荘久一原作の『舌町物語』などを描いた。『舌町物語』の連載が終了した後、同じ年の『漫画アクション』に読み切り作品として出した『じゃりん子チエ』が好評で、同じ登場人物の数本の読み切り単発作品を掲載した。同作はこの過程を経て、1979年から連載作品となった。『じゃりん子チエ』は、その時から約20年という長期にわたり新作が出されることとなった。当然、はるき作品の中では最も単行本の巻数が多い。所謂「スピンオフ」作品、「番外編」作品も多数出版された。テレビのアニメーションにもなり、はるきの代表作となった。

『じゃりん子チエ』の連載が決まり、非常に多忙となった同じ年の1979年から、はるきは日本文芸社の『カスタムコミック』でも『日の出食堂の青春』の連載を始めた。それは

彼にとり憧れのマンガ家、つげ義春も同誌に作品を出すと聞き、つげ作品と自身の作品が同じ雑誌に掲載されることが嬉しかったからだという<5>。

『日の出食堂の青春』（以下『日の出…』と表記する）は、1979年から1980年の『カスタムコミック』に掲載された全8話で構成されている。1981年に同誌版元の日本文芸社から単行本が出され、1989年に双葉社からアクションコミックスとして出版された。2004年に双葉社の双葉文庫名作シリーズの1冊となった。これに1989年のアクションコミックス版にもある、『「日の出食堂」の頃』というタイトルの「あとがき」が掲載された。2010年に同じ双葉社から新装版が出た。

『日の出…』は1982年にNHKが放映した『銀河テレビ小説』の1シリーズとして、全20回の連続ドラマとなった。このドラマには当時の若手俳優の太川陽介、熊谷真実、柴俊夫らが出演した<6>。

『日の出…』のあらすじ

主人公のアキラは、大阪の下町にある商店街の小さな定食屋の「日の出食堂」の跡取り息子である。彼は高校へ進学しなかった。それは憧れの同級生・吉田美津子（ミッチャン）が、母子家庭の母親が営む豆腐屋家業を手伝うために進学しなかったため、それに倣ったからだ。アキラと同じように高校へ行かなかった友人が3名いた。大人しいノブオ、察しの悪いイクオ、気の強いハルオである。物語をよく読むと、彼らは17歳になっており、18歳を目前としていると思われる描写がある。高校3年生に該当するわけだ。彼ら4人はその時まで、家業を手伝わず、勉学に励むこともなく、アキラの自宅兼定食屋の上階にある住居部分に集い、怠惰な日々を過ごしている。母親たちは息子たちに頭を痛めており、アキラの父親は気の強い「シッカリ者」の妻に圧倒されている。

ある時、中学校で最も「ワル」だった迫丸武史が美津子と母親の紹介で近くの豆腐屋に就職した。迫丸は美津子の積極的な働きかけで付き合うこととなり、最終的には彼女と結婚する。アキラ達は迫丸と美津子が接近していることに憤る。美津子が迫丸に騙されていると思い、恋路の邪魔をする。しかし、美津子の迫丸に対する想いと決意が固いことを知り、最終的には美津子を祝う。

迫丸には複雑な感情を抱くアキラだったが、ある映画を観たことで「男として」迫丸に忠告した。その映画の主人公の男に自分の人生を重ねたアキラ達は結婚や男として生きることの苦難について考えるようになったのだった。

以上の主要登場人物らとともに、迫丸の親代わりだったヤクザの鷲尾、鷲尾を慕うチンピラ達、などが重要な役を演じる。物語の舞台は大阪の下町と思われる商店街にあるアキラやノブオ、美津子の店舗を兼ねた自宅や、主人公たちが集う映画館「銀映」や、喫茶店の「ブンブン（BUNBUN）」、近所の病院や公園である。

『日の出…』の教材利用

『日の出…』の重要なテーマは若者の成長である。これは大学生をはじめとする思春期以降の人々にとり、自身や身近な人の生き方を考える上で重要であろう。一方で、登場人物たちの言葉や身近な物品や街並みなど、社会的背景と関連した描写からも学ぶ契機を得られる。以下、幾つかの項目に分けて説明する。

商店街

『日の出…』が描かれた1980年前後は、高度経済成長期が終焉を迎えバブル経済に向かっていく時期だった。その頃から既に商店街の活気が失われていた様子が『日の出…』にも描かれている。親が経営する小規模店舗を継げばよいと楽観的に構えてきた主人公のアキラらの未来が明るくないことを予感させる。

例えば、寂れ始めた商店街にあるアキラの定食屋は、それでも「大入り」であるが、客の多くは近くにできる大型スーパーマーケットの建設や、その前に行われている映画館解体工事に従事する作業員たちである。工事が進む物語終盤、映画館跡地に建設予定のスーパーの地下は食堂街になり、家業もそれで終わってしまうのではないかと父親は語る。彼の妻（アキラの母）は「そやけど、最後はやっぱり定食屋やおまへんか。レストランなんか入っても、わたい、どうも落ちつきまへんで……」と話す、父は「……、わしらはな」と世代が変われば、レストランの方が良いと思う客が増えるだろうと正確に見抜いている。

豆腐屋の美津子が彼らの定食屋に注文を取りにくる。絹ごし豆腐と木綿豆腐の納品数を尋ねるといふ、毎日のルーティンワークだが、小さな個人豆腐店の上得意である定食屋が傾けば、美津子の店も安泰ではない。

美津子がノブオの実家の家業である天ぷら屋に海老天とかき揚げを買いにくる場面もある。このような小さな商いが上手く循環するかといえ、この物語が描かれた頃から40年以上経つ2024年現在の答えは地域によってはかなり難しいと言わざるを得ない、だろう。平成に入った後の大阪の商店街調査<7>も興味深い。

ノブオの天ぷら屋前には商店街のアーケードの屋根がある様子も描かれている。そのアーケードもメンテナンスに費用が掛かるため、存続は大変だろうと想像させられる。

アキラ達のたまり場の一つが、ブンブンという喫茶店だが、商店街には「シキシマ」という喫茶店もあると描写されている。都市部の活性化した大型商店街では複数の喫茶店が成り立つが、大型スーパーができた場合は客層も変わるため、その営業形態や並立状態もどうなるのか、フィクションであっても考えさせられる。

1970年代前半、大型店舗が商店街の小規模店を圧迫しないよう、百貨店法を改め、大店法と呼ばれた大規模小売店舗法（大規模小売店舗における小売業の事業活動の調整に関する法律）が施行された。それから10年も経たないうちに、『日の出…』に描かれるような

状況が人口密集地の都市部の商店街でも見られるようになった。法律で大型店を規制しても、人の流れを大きく変えることは難しい。ちなみに、同法は規制緩和後、2000年に廃止された。この前に、アメリカ政府の申し立てや、WTOの紛争処理委員会での議論などがあった。大店法廃止の前に、大規模小売店舗立地法成立、中心市街地活性化法の制定、都市計画法の改正があり、「まちづくり3法」と呼ばれた。『日の出…』の描写は、このような海外との交渉や、国内法、制度などについての議論の入口ともなる。

映画館

人々の娯楽の花形だった映画が衰退し始めたのは、日本では入場者数が最高潮に達し、下降線を辿るようになった1950年代後半からとも言えるだろう<8>。テレビの受像機が家庭に普及していった1960年代には、映画は更に衰退し、『日の出…』が描かれた時代には大きく観客数を減らした。

『日の出…』には、美津子の家の豆腐屋で商店街にある映画館・銀映の広告を店に貼っているため、無料招待券が毎月2枚貰える、という場面がある。その銀映では、仁義、死、という文字が見える看板が表にある、所謂「やくざ映画」を3本立てなどで上映しているという設定だ。アキラ達がしばしば裏から無断で侵入し、気分転換し、客も少なく寂れている。対照的に、真面目な映画を上映するライオン映画館は観客もある程度入っていると描かれている。二極化の象徴のようにも読める。

廃業された銀映は、物語の最後の方で解体作業が進んでいる場面がある。前項で記したように、跡地は大型のスーパーマーケットになる予定だ。このような風景は日本の各地で見られてきたことだろう。

『日の出…』において、このエピソードが描かれたのは、アキラ達が、迫丸と結婚した美津子が妊娠したことを突き付けられ、漸く実感を抱かされる場面である。憧れの美津子と、「ワル」だった迫丸が社会人として落ち着いていく一方で、アキラ達は現在の言葉でいえば「ニート」生活を送っているわけだ。複雑な気持ちでアキラ達が銀映を見に行くと、解体作業の囲いがされ、建物自体は見られなくなっていた。4人は銀映の看板が捨ててあるのを見つけ、アキラの部屋に持ち帰る。映画館が営業中、看板の中に入れられた電灯で光っていたように、ノブオが工夫する。映画館の看板だけが光る部屋で、アキラ達はかつての銀映やこれまでの生活を思い出し、「オレらの青春が」終わった、という感覚を抱く。ハルオは「銀映もミッチャンも、いっぺんになくなってしもたもんなあ」と呟く。商店街の衰退とともに、映画館の廃業や、特筆すべきものがない若者たちのやりきれない気分が重ね合わせられた時代描写は、2024年現在の若者が自身の生活を振り返る上でも何かを投げかけるのではなかろうか。

コンプライアンス

『日の出…』が連載された1970年代末は、現在とはコンプライアンス意識が異なる。それが伺える描写も多数ある。例えば、物語の最初の方に、アキラが見ていたテレビ番組で、夫が夫と子どもを捨てて出奔した妻に帰宅を呼びかける場面がある。その夫は、競馬、競輪、競艇といった公営ギャンブルや、パチンコという三店方式で脱法的だったギャンブル、花札、サイコロ、麻雀という違法性が疑われるものから、Zゲーム、ペッタン、ポッコンなどの賭博ではないゲームもやめる、という戯画化された台詞を語る。彼の息子と娘は母親である妻に「帰ってくるな、毎日バクチ打ってるんや」と父親の決心が嘘であることを冷静に告げるギャグマンガ的な要素もある。かつて、このような犯罪とは直接結びつかない失踪者への呼びかけをさせる番組は珍しくなかった。無論、21世紀に入っても犯罪被害者と推量される家族を探す形態の番組は放映されているが、ギャンブル依存であることをカミングアウトするような呼びかけ人を出すこと自体が難しいだろう。

身体的な暴力描写もギャグマンガ故か目立つ。アキラやハルオが仲間であるイクオやノブオを軽く殴ったり、アキラの父が店の客用の丸椅子（スツール）を振りかざして叱ったりする場面がある。チンピラとの乱闘シーンもある。後者についてはケンカに勝って喜び、何度もその乱闘を喜んで反芻するノブオも描かれている。アキラ達の母親達が怠惰な「ニート」息子達の「寝込み」を襲い、折檻する場面もコミカルに描写されている。『日の出…』の時代でもこのような暴力が現実には日常化していたかは不明だが、非現実であったとしても2024年現在、実写ドラマや映画で安易にそのまま描写するわけにはいかないのではないか。

暴力的な示威をし、パチンコ屋の桃太郎にいるアキラから「大当たり」のパチンコ台を奪う男も描かれている。この男は、はるきの代表作『じゃりん子チエ』の主要登場人物であるチエの父親・テツであろう。現在のパチンコ店でこのようなことがあり得ると捉えられるのだろうか。

迫丸の親代わりでもあった鷲尾というヤクザや、鷲尾の部下であるチンピラなどとのコミカルな交流も、暴力団対策法などが施行され、現在は描かれにくい状況になっているのかもしれない。チンピラと仲が良かった迫丸は中学生時代、「ケンカで無期停くうたん、あいつだけやもんな」とされているが、無期停学の処分を受けることそのものも、珍しいだろう。また、現在のヤクザは中学生に対し、そのようなことはしないだろうが、「半グレ」と呼ばれる人たちと、家出少年・少女との関係が所謂「トー横」のような社会問題になっていることと本質は余り変わらないのかもしれない。

また、前項に記した銀映という映画館に裏のトイレの窓からアキラ達が侵入し、「タダ入り」する場面もあるが、現在では子ども向けの映像作品などでは問題にされるリスクもある。

アキラがノブオに（自分の親が経営する）「店のカネのくすね方」を教えた、というエピソード

ソードもあるが、キャッシュレス決済が進めば、そのようなことが無くなるのだろうか。

『日の出…』には現在の基準でも未成年のアキラ達が喫煙、飲酒をする場面が出てくる。前者に関しては特に多い。初出の雑誌連載時は不明だが、底本にした2004年の文庫版では、喫煙、飲酒それぞれ初出の場面で「たばこは20歳を過ぎてから」(8頁のアキラが敷きっぱなしの布団の上で怠惰な様子で喫煙しているシーン)、「飲酒は20歳を過ぎてから」(181頁、美津子と迫丸の結婚式前夜のヤケ酒のシーン)の注意書きが、コマの枠外に掲げられている。また、イクオが煙草に慣れず、吸い始めはむせるような様子も描かれており、キャラクターの性格が伺えるような工夫もされている。高校進学をすべきだったかもしれない、とアキラ達が話す場面では、学校では「タバコ吸うたいうだけで、親に始末書書かせたりするらしいど」と喫煙への意識が軽いものであることが推測される描写もある。また、そのように話していたアキラ達が、警察官の職務質問で煙草の箱を握りつぶされる場面もある。

セクシュアルハラスメントに関する描写も多く、現在では疑問を持つ学生も多いのではないかと考えられる。例えば、美津子に交際を申し込む前に、喫茶店のウエイトレスを練習台にしようとイクオが考え、実行する場面である。イクオは、ウエイトレスの手を握ってデートに誘うが、「ガキのくせに」とイクオを「ドツク」というギャグ描写になっている。このエピソードの前には、「女はリードしてくれる男に弱い」という話をした後、阿弥陀籤で美津子へのアプローチ順を決める場面もある。これらは実行者であるアキラ達が失敗する、という否定的な文脈で描かれているが、2024年現在、場合によっては大きな問題になりかねないだろう。

桑田という美津子の中学担任教師を迫丸が殴った思い出話が出てくる場面も現在とのコンプライアンス意識の差を感じさせられる。迫丸の「武勇伝」を耳にした美津子の母親が、桑田が美津子を嫁にくれと相談してきた、と語るのだ。美津子の母親はそれを全く問題だとは思っていない様子で描かれているが、現在では教育委員会で処分されかねない案件であろう。『日の出…』においても、ハルオが「生徒と結婚しようなんて反則やぞ」と桑田に憤るが、それは憧れの人・美津子への求婚だったからではないか、とも読める。つまり、ハルオというキャラクター自体も、生徒と教員の結婚について問題を全く感じていない様子であるのだ。

迫丸のアパートのカーテンが変わっていたというエピソードでは、アパートに美津子が入りし、カーテンを変えるほど交際が深まっていることを示している。カーテンを変えるのは女みたいだ、と揶揄する場面もある。いずれについても、現在はこの文脈を理解しない人もいるだろう。

生活様式

『日の出…』では、登場人物が鼻緒付きの履物を履いている場面が幾つか描かれている。

例えば雨の日に美津子と出掛けた迫丸である。台詞では、映画館の銀映が「ステテコに下駄ばきで行くところ」だとされる場面もある。1970年代末は半世紀近く経った2024年よりも、下駄や草履が日常的で、尚且つ「インフォーマル」なものだったのだろう。

アキラが、新聞のテレビ番組予定表が掲載されている部分を階下の店から持ち出す場面もある。2024年現在、新聞を電子版ではなく、紙に印刷されたものを契約販売店から毎日配達してもらう世帯も減り、ニュース記事そのものを読む人も減っている。そもそも、テレビを視聴する若者も減り、テレビ番組表もデジタルデータでテレビ受像機そのものに映せ、スマートフォンなどでも確認できる現在は、新聞紙のテレビ番組表を欲する人も少ないだろう。

暑さを覚えたアキラ達が「クーラーが入っているところに行こう」と述べる場面もある。現在も冷房、クーラー、とも呼ぶが、エアコンとすることが一般的だろうか。加えてクーラーが無い店もある、という当時の状況も読み取れる。現在、エアコンを備えていない飲食店は余りないだろう。

「コタツ、切って来たやろな」という台詞もあり、電気炬燵の電源を切る、ということであるが、温かい地方に住む現在の人には余り通じないかもしれない。

お腹を下したイクオが公園のトイレに向かうが、そのトイレにはトイレットペーパーが無いので「チリ紙」を借りるシーンもある。2024年現在もそのような公衆トイレはあるが、駅などではトイレットロール紙が設置された公衆トイレが都市部では一般的だろう。また、「チリ紙」と呼ぶことは稀で、携帯しているものはティッシュ、ポケットティッシュと呼称するだろう。

トイレに関しては、アキラの家のトイレは汲み取り式であろうと推測される。便所にはまって死ぬ、下からぬるっと手が出てくる、という怪談でノブオを脅して押搦するシーンがあるからだ。大阪府は「昭和52年(1977年)に南区(当時)が全国の市町村・行政区で始(マ)めて100%を達成」、2010年段階で「全市の普及率は99.9%」と発表した<9>。国土交通省によれば、2023年3月末の段階で、全国の汚水処理人口普及率は9割を超えている<10>。住宅・土地統計調査(総務省)をベースに国土交通省国土計画局が作った資料によれば、『日の出…』連載終了後、約2年経った1983年段階の大阪府の水洗化率は7～8割であり<11>、全国では高いものの、現在とは比べ物にならないほどであることも分かる。

その他、酔ったアキラ達が、森進一の歌を歌ったり、貸本屋で「ネコババしたマンガ」を返しに行くと言ったりする場面がある。森進一は1966年にデビューし、『日の出…』が連載された1979年2月に大手の芸能事務所から独立し、個人事務所を作った<12>。2024年現在も、芸能人の独立は大きな問題になると言われているが、当時はもっと圧力があつたという話もある<13>。はるきが登場人物に森進一の歌を歌わせたのは、このことも踏まえていたのかもしれない。また、貸本屋や「ネコババ」することは2024年現在、ほとんど

無いだろう。

飲食物についても興味深い記述がある。アキラの両親が営む大衆食堂で、ある日供された味噌汁の具はシジミであり、それは「最高や」というものだ。ノブオの家の天婦羅屋はエビ、イカ、カキ揚げ、イモの天ぷらなどがある設定となっている。「かどや」という店がかき氷と中華そばを食べる場面もある。結婚を考え、人生の転換点に立たされた迫丸がアキラ達を、自宅アパートでコーヒーを飲んでいくよう誘った場面では、インスタントコーヒーをポットの湯で溶かしている。これも当時の飲食にまつわる生活を想像させる。

また、猥褻や暴力表現を含む18歳以上に限定された「Zゲーム」という言葉も出てくる。メンコを指す「ペッタン」や、牛乳瓶の蓋をひっくり返すゲームの「ポッコン」という言葉も出てくる。つまり『日の出…』には、かつての遊びについても学ぶ糸口がある。

言語

『日の出…』は物語の舞台となっている大阪の方言が、登場人物のセリフやアキラによるナレーションの基本となっている。敬称に「はん」を用い、捨てることを「ほる」と記し、殴ることを「ドツク」と言い、おでんのことを「関東煮」、「関東だき」、肉饅頭（肉まん）をブタマンと表現し、「関東だき煮てた」と作業内容を表すのは、その特徴であろう。また、「毎日バクチ打ってるんや」という「い抜き言葉」が見られるのも興味深い。「すんませ〜ん」、「す…す…すんまへ〜ん」、「どおいたしまして」等のように、実際に聞こえる音に近い仮名を宛てた、生き生きした台詞もある。

大阪方言を使っているアキラが、ナレーションで「男として……、ここは男として、迫丸君と美津子さんを祝うのだ」と述べる場面では標準語になっているのは、主人公の決意や矜持を表しているのだろう。標準語は畏まった場面で、ということなのだろうか。標準語の地位が高まり、大阪方言、つまり「上方」言葉の地位が下がっていることを、はるきは無意識に示したとも推量される。

表紙絵やタイトルにもなっている、アキラの両親が営む「日の出食堂」の看板中央に「めし」が大書され、その周囲に、「関東煮、天ぷら、定食一般、日の出 食堂 おいしい おいしい ああ おいしい」と記されているのは、庶民的な定食屋を端的に表現している。ここで出す定食を「サバ定」のように省略することも興味深い。マンガの表現ということもあるのか、味噌汁は「ミソ汁」と一部が片仮名表記である。ノブオの家の天婦羅屋にある「イモの天ぷら」を片仮名で表記するのと同じであろう。アキラの両親が、豆腐屋の美津子に、「50、30」、「絹ごし50に、木綿30や」と豆腐を発注する台詞も店舗を運営する様子を上手く伝えている。

天婦羅については、上記のように「天ぷら」と平仮名で書いている場合もあるが、ノブオの家業に関する台詞では「天ぷら」と片仮名表記のこともある。

ヤクザをヤーさん、と呼ぶシーンもある。鷲尾が盲腸という名目で手術を受ける山之内

病院は、かつて山口組の顧問弁護士を務め、サブカル誌でも記事を書いていた山之内幸夫元弁護士のことを踏まえているのかもしれない。

商店街の小規模店の後継者であるアキラ達について、「アキちゃん」などのように「ちゃん」付けで呼ぶ場面があり、幼馴染と思わせるような工夫がされている。美津子も含めた彼らの母親達は、互いに「お春はん」、「お島はん」、「松ちゃん」と呼び合う。アキラの父は「お島はん」のことを「島ヤン」と呼び、彼女からは「安ッさん」と呼ばれている。この呼称の違いは、性別が異なるという距離を端的に表しているのかもしれない。迫丸は、鷺尾のチンピラから「迫」と呼ばれ、アキラらからは陰で「迫丸」と呼ばれるが、対面の場合は「迫丸君」と呼ばれる。以上の呼称の違いは、相手との関係性により対象詞（や自称詞）が変わる日本語の特性を上手く表す例であろう。美津子と迫丸は結婚した後も、ミッチャンと迫丸君と呼び合う。アキラの母親が若夫婦だからそれでも良いとする場面がある。呼び方の変化が社会的関係の変化でもあることを示唆するシーンである。

父親がアキラを「グータラ」や「ミノ虫」と呆れて呼ぶシーンがある。女のことを、「スケ」、「アマ」、若い男を「あんさん」、教師のことを「先公」、かつての「愚連隊」のようにぐれた人のことを「グレン」と表現する部分もある。このような俗語の記録としても『日の出…』は興味深い資料だろう。

アキラの父が注文を取りに来た迫丸に、「すっかり、豆腐屋が板についてきたやないか」と声をかけ、迫丸が「まだまだ新米ですわ」と応じるシーンもある。「板につく」、「新米」という用語も2024年現在の若者の中には知らない者もいるだろう。他にも、前項で記したチリ紙や、それ以外にもチリガミ交換、便所、カルメラ、ボンクラ（盆暗）なあととり（跡取り）、ガン首（雁首）そろえて、背広、ふだん着、パンー、ステテコ、というような言葉も2024年現在は通じにくくなっているかもしれない。

貧困

迫丸は中学1年生の時に父親を亡くし、父親に恩義を感じていた鷺尾の庇護を受けるようになった。母親も既にいなかったと読者が推測できる記述もある。「教師をドツいて停学に」なるなど、荒れていた迫丸には穏やかになった後も、アキラ達は「君」付けで呼ぶほど恐れているという描写がある。美津子と交際するようになり、笑ったことのない迫丸が笑顔を見せ、美津子の紹介で「駅向こうの豆腐屋」に就職する。中学校で教師を「ドツ」いた迫丸は、就職したくとも就職できない、中学校から就職先を斡旋されなかったという話になっている。そのような人は『日の出…』で描かれるようにヤクザになることもあったのだろうが、現在も半グレ、ホスト、非合法の売春など「グレーな」世界に若者が流れていると推測される。ヤクザは暴対法などで規制されたが、貧困で困っている子どもや、社会的援助が得られない子どもをはじめとする人々の問題は残っているだろう。

美津子は母子家庭で、母親が切り盛りする豆腐屋を甲斐甲斐しく手伝っている。自宅兼

店舗で経営が上手く行っている母子家庭はどのくらいあるのか。このようなことを考えさせられる契機もある。

成年年齢

美津子と迫丸の結婚の障壁を探そうと、アキラは教科書を見て結婚可能年齢を調べ直す。女子は16歳、男子は18歳にならないと結婚できず、未成年の場合は親の承諾が必要という内容に辿り着いたアキラは、迫丸は17歳であり、しかも承諾をすべき両親がいないことで、結婚できないと安堵するのだ。しかし、親代わりの保証人がいればよく、年齢も月日が経てば結婚可能年齢に達する、というノブオの言葉に愕然とする。

2022年、民法改正により成年年齢が20歳から18歳に引き下げられた。女子の結婚は16歳ではなく男子と同じ18歳からになった<14>。また、親権者の同意も不要となったのである。法改正と生活の関係について学ぶ契機となろう。

人生モデル

『日の出…』はタイトル通り、アキラ達の青春を描いた物語である。つまり、教養小説の支柱である、主人公の成長がある。

作品中、アキラにとり最も重大な事件は、片思いし続けてきた美津子の恋愛と結婚、つまりアキラの失恋だ。それが単なる失恋譚ではなく、成長に繋がっている。例えば、アキラは、ニート仲間のノブオらと『はたらき蜂』という劇中劇たる映画を観る。その映画は荒れた生活を送る主人公の青年がヒロインの働きかけで更生し、彼女と結婚するところから始まる。迫丸と美津子の関係の喩えのような、通常青春物語ではハッピーエンドの「もう話済んどるやないか」という場面が映画の冒頭なのだ。これは大恋愛を経た結婚生活が心湧き踊るものとは限らないことを示す。

映画の主人公は、妻とその母親が家業とする氷屋で身を粉にして働く。アキラらは男に同情する。ハルオが「嫁はんと、嫁はんのお母さん食わさなあかんからなあ」と語り、アキラが「そやけど、女は二人で遊びまわっとるやないか」と疑問を呈する。辛い労働で苦しそうな男の顔のアップが頻繁に現れ、彼の後ろで妻とその母が優しく微笑む。これは迫丸と美津子、美津子の母の生活を暗示している。

映画視聴後、映画の主人公について「カッコ良かったんは結婚するまでや」とアキラが述べる。「好きやからゆうて、結婚出来ても、どうなるか分かれへんねんなあ」とハルオが嘆息し、アキラは「死ぬまで働いてばっかりなんて、たまらんもんなあ」、「意外と結婚ゆうのは、おとろしいんかも知れんなあ」と呟く。

その会話後に偶然擦れ違った美津子の母に伴われ、アキラ達は迫丸の「背広」を新調する買物に付き合う。美津子の母はアキラ達に「ええ男が、一人でおったら、ロクなこと覚えまへんからなあ」と話し、娘の美津子にも迫丸と早く結婚するよう勧めたと語る。彼女は

現実的な女と、非現実的な夢を追い続ける男の問題を話す。その内容をアキラは把握しきれなかったものの、美津子の家は「お父はんが居らんかったけど、ミッチャンのお母はんは、なんか男にうらみでもあるんやないやろか」と思うのだ。美津子とその母の思惑に乗せられている迫丸に、アキラは『はたらき蜂』を迫丸単独で見た方が良くと忠告する。

迫丸に豆腐屋の仕事を紹介し、その仕事内容を覚えた頃に結婚話が出、18歳になる10月に結婚式を組み、迫丸の親代わりをノブオの母親に依頼し、結婚後は美津子の店に携わるという工程を、美津子は迫丸との交際当初から考えていたかもしれない、とアキラ達は感じる。アキラ達は「堅実な」人生設計を持ち実現しようとする女子と結婚するのだろうか。

アキラ達は、二人の結婚式前に「決死の覚悟で」ヤケ酒し、二日酔いで式に出席し、記念写真にもその様子が伝わるように記録される。アキラは「正直ついでにもう一言ゆうなら、あの時のミッチャンは、いままでで一番きれいやった」と語り、それが物語の最後の言葉となる。最後の場面でアキラ達の青春は終わったか、大きな区切りを迎えたわけだ。

結婚後、豆腐屋としてアキラの店に注文を取りに来た迫丸を「さすがはミッチャンや。見る眼があるわ」とアキラの母親が評価する。妊娠した美津子は物語に姿を現さない。アキラの父は「オヤジになるとしたら、仕事にも気合が入るやろ」と声を掛け、「あとはミッチャンにまかして、男は、仕事に精出すこっちゃ」とまとめる。アキラの母は「男も女もそうですわ、子供持ってやっと、一人前なれるんですわ」と続ける。

迫丸夫婦と、アキラの両親は、真面目にルーティンワークに精を出せば、細やかだが幸せな生活を得られるというモデルを表している。アキラ達は衰退しつつある商店街で、共に店を切り盛りする妻を迎えるのか、青春のモラトリアムたるニート生活を続けるのか。これについて、はるきは描いていないが、イクオに「他の仕事やろ思たら大変やど」、「オレら、学歴がないからなあ」と語らせている。アキラ達の経済的にも明るくない未来を予感させる。高校や大学を卒業後、すぐに就職し給与生活者として働くコースから外れているからだ。

しかし、このような人生モデルは商店街や映画館同様、変化を求められるものだったのかもしれない。非正規雇用率は、平成2年には男全体の9%だったのだが、令和に入った頃には2割を超えた。15歳から24歳では平成初期から2割前後、25歳から34歳では平成初期は5%以下だったものが平成15年頃からはコンスタントに1割を超え、35歳から44歳ではそれより5%ほど少ないものの、下がる傾向は見られない<15>。年収が比較的高いかそれが見込める男性正社員に女性専業主婦労働者のカップル、というモデルは成り立ちにくくなり、結婚したくともできず、子どもを持ちたくとも持てない考える人が多く、日本は少子高齢化先進国となった<16>。

無論、所謂「良い大学（高偏差値大学）」を順当に卒業すれば、高収入の安定した大企業正社員になりやすいことは、事実だろう。インターンシップ参加などで「学歴フィルタ

ー」があるからだ<17>。しかし、それも今後大きく変わっていくだろう。「学校の成績は当てにならん」、「ノブオが四人の中で最も良かった」、「先公も見る目ないよ。もうちょっと人間見て点つけてほしかったなあ」というアキラ達の言葉のように、現実的に生きる力は学校の成績と必ずしも比例しないからだ。

まとめと今後の課題

上に記したように『日の出…』では様々なテーマの学びの端緒となる。紙幅の都合で細かな部分には触れられなかった上に、筆者が読み取れていない箇所も多々あるだろう。例えば今回、本稿を執筆する上で文献調査を行うまで、管見にして『日の出…』がテレビドラマ化されていたことを知らなかった。つまり、他にも筆者が知らないことは他にもあっても全く不思議ではない。

以前、本誌で採り上げた『スター・レッド』<1>と同様、『日の出…』は約半世紀前の作品である。つまり、この半世紀から、これまで本誌で報告した比較的近年の『暗殺教室』、『望郷太郎』以外にも、筆者が知らない名作マンガは大量にあるに相違ない。筆者が既知っている作品にも教材化の視点で見直すべきものも多いだろう。今後も多数の作品をこの視点で再発見し、本誌を中心に発表していきたい。

謝辞

本稿は名古屋芸術大学の個別研究費および平成 31（2019）年度および令和 3（2021）年度および令和 4（2022）年度の特別研究費（課題名「高大接続教育、大学教育、社会人教育における児童・ヤングアダルト文学作品およびマンガ作品の教材としての利用」）の助成を受けた。娯楽マンガは日本国内の作品に限定しても数多ある中、教材採用候補作品について名古屋芸術大学の教員および助手、事務職員、学生の方々にご示唆を頂いた。編集と出版に尽力して下さった名古屋芸術大学キャリアセンターの教職員各位、校正にあたられた印刷・製本会社の方にもここで感謝申し上げる。

文献および註

- <1> 茶谷薫、「学習マンガ」ではなく「娯楽マンガ」を教材利用する意義—『スター・レッド』を例に、名古屋芸術大学教職センター紀要 9 号、2020、1-13 頁
- <2> 茶谷薫、娯楽マンガ作品を教材に —『暗殺教室』に描かれた理想の教師・学校像—、名古屋芸術大学キャリアセンター紀要 10 号、2021、63-75 頁
- <3> 茶谷薫、娯楽マンガ作品を教材に（3）山田芳裕作『望郷太郎』、名古屋芸術大学キャリアセンター紀要 11 号、2021、83-94 頁
- <4> 本稿では 2004 年に双葉社が発行した双葉文庫名作シリーズを底本とする。本稿で説明したよう、これは 1989 年の同社アクションコミックスと内容は同じである。

- <5> 上記<4>掲載の「あとがき」(212-213 頁)
- <6> NHKアーカイブウェブサイト、2024年3月20日閲覧 https://www2.nhk.or.jp/archives/movies/?id=D0009044133_00000
- <7> 加藤勝敏、林野隆彦、岩崎義一、2012、大阪市内商店街の盛衰要因に関する研究、日本都市計画学会関西支部研究発表会講演概要集、10巻、5-8頁
- <8> 前田耕作、細井浩一、2012、映画産業における寡占の形成と衰退―日米における「撮影所システムの黄金時代」の比較を通じて―、アート・リサーチ、12巻、3-15頁
- <9> 大阪市、2010年12月1日発表、2024年3月20日閲覧、大阪市下水道のあゆみ、
<https://www.city.osaka.lg.jp/kensetsu/page/0000009458.html>
- <10> 国土交通省、2023(R5)年8月22日発表、2024年3月20日閲覧、令和4年度末の汚水処理人口普及状況について、国土交通省、2023年度末資料、下水道整備の推進、
https://www.mlit.go.jp/mizukokudo/sewerage/crd_sewerage_tk_000134.html、
https://www.mlit.go.jp/report/press/mizukokudo13_hh_000537.html、別紙資料
<https://www.mlit.go.jp/report/press/content/001628141.pdf>
- <11> 国土交通省作成資料、<https://www.mlit.go.jp/kokudokeikaku/monitoring/system/english/contents/14/14-3-6.pdf>
- <12> 森進一公式ホームページ「もりこみ」、プロフィール、2024年3月20日閲覧、<https://www.jvcmusic.co.jp/mori/profile/>
- <13> 星野陽平、2019/09/11 06:00 公開、2019/09/11 06:00 更新、2024年3月20日閲覧、
実録 芸能人はこうして干される 1979年に渡辺プロを独立 森進一が受けた“森潰し”の圧力、日刊ゲンダイ Digital、<https://www.nikkan-gendai.com/articles/view/geino/261615>
- <14> 法務省、2024年3月20日閲覧、民法(成年年齢関係)改正 Q & A、https://www.moj.go.jp/MINJI/minji07_00238.html#:~:text=%EF%BC%A1%20%E6%88%90%E5%B9%B4%E5%B9%B4%E9%BD%A2%E3%82%92%E5%BC%91%E5%BC%98,%E9%81%94%E3%81%99%E3%82%8B%E3%81%93%E3%81%A8%E3%81%AB%E3%81%AA%E3%82%8A%E3%81%BE%E3%81%99%E3%80%82
- <15> 男女共同参画白書 令和3年版、第2章、第1節 就業をめぐる状況 https://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/r03/zentai/html/honpen/b1_s02_01.html
- <16> 久我尚子、2016年07月14日公開、2024年3月22日閲覧、若年層の経済格差と家族形成格差―増加する非正規雇用者、雇用形態が生む年収と既婚率の違い、ニッセイ基礎研究所、<https://www.nli-research.co.jp/report/detail/id=53393?pno=1&site=nli>
- <17> 山田昌弘、2020、日本の少子化対策はなぜ失敗したのか? 結婚・出産が回避される本当の原因、光文社(光文社新書)
- <18> 溝上憲文、2021年12月21日 8:00 公開、2024年3月22日閲覧、大手人事部が証言

「インターンの9割がGMARCH以上」学歴フィルターを使う理由2つ 就活サイト
が利用を仕掛けている、プレジデント・オンライン、<https://president.jp/articles/-/52959?page=1>